

## グループ研究発表（情報組織化研究グループ）「京都における学術情報システムの受容」

今野創祐（京都大学工学研究科吉田建築系図書室）

### 1. 研究の概要

#### 1.1 研究の背景

2021年2月、東條文規による著書『図書館にドン・キホーテがいた頃：1980～90年代の図書館少数者運動』<sup>1</sup>が出版された。この図書はタイトル通り、1980年代から90年代にかけての日本の図書館における様々な運動の実態について、筆者自身の体験談も交えて書かれたものだが、この図書の第三章から第五章にかけては、学術情報システム導入に対する図書館界の動きがまとめられている。学術情報システムとは、1984年以降、大学等を対象として運用が開始された、総合目録データベースの形成と図書館間相互利用を目的とする目録所在情報サービスのことである。

この東條の著書は発表者が読む限りいわゆる回顧録であり、学術的に、網羅的な文献調査が試みられたわけではない。この著書において文献調査の対象となっているものは、主に大学図書館問題研究会（現：大学図書館研究会。以下、略称として「大図研」を使用）が発行した機関紙「大学の図書館」（継続前誌：「大学図書館問題研究会会報」）および学術情報システムを考える会が発行した機関紙「学術情報システムを考える会・会報」（継続後誌：「巨大情報システムを考える会・会報」）である。

この著書においては、学術情報システムに対する当時の図書館界のスタンスとして、1980年ごろに学術情報システムが大学図書館にとって重要な問題だったが具体的なイメージは抱けず、電算化が急務で、電算化の問題として捉えられていたこと<sup>2</sup>、1981年に大図研が本格的に学術情報システムの問題に取り組み始め<sup>3</sup>、以下の問題点を指摘したことが挙げられている<sup>4</sup>。

- ①研究機能の一面的重視と大学の教育機能に果たすべき図書館の役割の軽視
- ②予算操作による大学の自治への介入と中央集権化
- ③拠点校を中心とした大学の系列化
- ④中小規模大学の単なるターミナル化
- ⑤職場の図書館員の階層化と少数精鋭主義の持ち込み

また、この著書によると、1983年になると、松井博は「軍・産・官・学協同の体制づくりに、学術情報システムもくみこまれていく危険性」を指摘し<sup>5</sup>、河田いこひはコンピュータに代表される進歩や現状自体を肯定しないという考え方を示した<sup>6</sup>。さらに同年、大図研常任委員会は「討議資料「学術情報システム」について」を作成し、その中で「「文部省学術情報システム」の問題点」として、以下を挙げた<sup>7</sup>。

- ①研究者サービスの一面的重視
- ②「資源共有」の名による大学自治の形骸化と官僚的支配、図書館運営の画一化と中央集権化
- ③選別による格差の拡大と全体としての大学図書館の貧困化

- ④国立大学中心、中小私立大学や短大の切り捨て
- ⑤職員の階層分化
- ⑥人員削減、労働強化、健康障害
- ⑦受益者負担主義
- ⑧学術情報の国家管理、大企業奉仕、軍事利用との結合の危険性

では、学術情報システムに関する文献は、当時、どの程度発表されていたのだろうか。発表者が発見した学術情報システムに関する文献リストを、以下の表1にまとめた。各文献の著者、タイトル、出版年、文献リストが掲載されているページ、挙げられている文献数を記したが、出版者など詳細な書誌的事項は脚注にも記した。

表1：学術情報システムに関する文献リスト

著者	タイトル	出版年	掲載ページ	文献数
かみかた機械化 研究グループ	「学術情報システム」その現状と 課題：研究情報と大学図書館のゆ くえ <sup>8</sup>	1985	xvii～xxii	90
かみかた機械化 研究グループ	文部省学術情報システムへの評価 と提言 <sup>9</sup>	1986	45～94	583
かみかた機械化 研究グループ	『大学図書館の機械化・電算化、 学術情報システム文献リスト』 1987年版 <sup>10</sup>	1987	全ページに 渡って掲載	559
かみかた機械化 研究グループ	『大学図書館の機械化・電算化、 学術情報システム文献リスト』 1988年版 <sup>11</sup>	1988	全ページに 渡って掲載	583
かみかた機械化 研究グループ	『大学図書館の機械化・電算化、 学術情報システム文献リスト』 1989年版 <sup>12</sup>	1989	全ページに 渡って掲載	380
巨大情報システ ムを考える会	雑誌「巨大情報システムを考える 会・会報」 <sup>13</sup>	1991～ 1993	各号に掲載	各号で 異なる 掲載数

このように、当時、学術情報システムに関する文献は膨大に発表されていたことがわかる。しかし、上記のリストを総覧しても、京大職組図書館職員部会が発行した機関紙「ばびるす」のような、職員組合が出した機関紙や、大学図書館問題研究会京都支部が発行した機関紙「大学図書館問題研究会京都」のような、大学図書館問題研究会の支部が出した機関紙はほとんど文献として把握されていない。

## 1.2 研究の目的

本研究の目的は、「ばびるす」および「大学図書館問題研究会京都」の内容分析を通じ、京都における学術情報システムの受容がどのようなものであったかを明らかにするこ

とである。京都において学術情報システムが導入された時期に、前述した大図研の挙げた問題点が、京都の大学図書館員たちの間でも問題意識として共有されていたのかどうか、あるいは、独自の問題意識を有していたのかといった点について検証する。

また、従来、日本の近現代の図書館史研究において、組合の機関紙の内容分析といった手法を用いた研究は管見の限りほとんど存在しない。本研究は、組合の機関紙の内容分析を通じて、近現代図書館における新制度等に対する図書館（員）の「受容史」を明らかにできるのではないかとこの研究手法の提案も一つの目的としている。

### 1.3 先行研究

学術情報システムについて書かれた文献は前述のとおり膨大に存在するが、ここでは主に研究手法という観点から、先行研究を挙げる。

湯浅俊彦の修士論文を単行本化した図書『出版流通合理化構想の検証：ISBN導入の歴史的意義』<sup>14</sup>および、湯浅の博士論文を単行本化した図書『日本の出版流通における書誌情報・物流情報のデジタル化とその歴史的意義』<sup>15</sup>は、いずれも日本図書コードおよびISBN導入に対する、当時の出版業界、市民団体、労働組合、図書館界の受容の在り方などを研究したものである。研究手法は、一部、インタビュー調査をおこないつつも基本的には文献調査となっており、調査対象文献は当時の出版・流通業界等の業界紙・誌、出版関連各団体や労働組合、図書館界の機関誌、声明文、総会議案書等である。本研究の手法は、こうした湯浅の研究手法を応用したものであると言える。

### 1.4 研究の方法

研究手法は文献調査であり、前述の通り、「ぱびるす」および「大学図書館問題研究会 京都」を対象とする。研究の範囲だが、1978年に文部大臣から学術審議会に対し「今後における学術情報システムの在り方について」諮問があり、学術情報システムの構想が表面化しており、1992年には図書館間相互貸借(ILL: Inter-Library Loan)システムの運用が開始され<sup>16</sup>、学術情報システムが或る程度軌道に乗ったと言えることから、1978年から1992年の記事を調査対象とする。なお、前述の文献リストにおける文献も、概ねこの時期に発表されている。

調査対象とする記事は学術情報システムに関する記事であり、「巨大情報システム」等、文脈上、同義語とみなすことのできるテーマに関する記事も含む。広義の学術情報流通体制、個別電算化に関する記事なども「学術情報システムに関する記事」とみなし、分析対象とする。本来的には、これらの論点に関する議論と、学術情報システムに関する議論は切り分けて論じられるべきであったかもしれないが、東條の著書においても引用という形で指摘されているように<sup>17</sup>、これらの論点は、学術情報システムに関する議論と切り分け不可であったとする指摘もあるため、本研究ではこれらの記事も分析対象とする。

## 2. 「ぱびるす」の分析

まず「ぱびるす」の概要について説明する。京大聴組図書館職員部会編であり、1973年4月に創刊し、現在も不定期で刊行されている。創刊号から241号までを全国で唯一、京

都大学附属図書館が所蔵しているが、275号以降は、京都大学職員組合のウェブサイトで公開されている<sup>18</sup>。なお、印刷が不鮮明で判読が困難な記事は分析対象から除外した。

京都大学職員組合は現在に至るまで、「支部」「部会」という二つのセクションによって組合員を区分するマトリクス組織となっている。組合員は通常、主として勤務する部局に置かれた支部に所属する一方、女性部、青年部の他、職種や雇用形態別に設置され、それぞれの属性に特有の課題にとりくむ部会にも所属する場合がある<sup>19</sup>。「ぱびるす」は「図書館支部」（附属図書館の組合員）ではなく「図書館職員部会」（全学の図書系職員の組合員の一部）により発行されている。以下、「ぱびるす」における1978年から1992年の記事<sup>20</sup>のうち、学術情報システムに関連していると思われるものを表2にまとめる。記事が掲載されている号数、発行年月日、記事のタイトルを示す。記事のタイトルについては、見出しが示されているものはそれを記入したが、見出しが無いものについては、内容を要約し、タイトルとした。

表2：「ぱびるす」における学術情報システム関連記事

号数	発行年月日	タイトル
53	1978. 6. 5	機械化委員会発足
55	1978. 8. 16	7/8-9、第四回日教組大学部職種別集会在東京で開催
57	1978. 12. 20	国立大学等間における文献複写業務改善要項（案）について
60	1979. 9. 12	連続7回の講習会「学術情報・コンピュータ・大学図書館」の案内
64	1980. 10. 15	コンピュータ化の強化へ
73	1981. 4. 8	学術情報について
74	1981. 4. 22	4/18に8支部14人の参加で図書系職員の今年度2回目の交流会開催
80	1981. 12. 2	10/17、図書館部会総会開催。1981年度の活動が報告
93	1983. 1. 13	図書館の機械化 整理中心の図書館から利用中心の図書館へ？
94	1983. 2. 7	3月ごろに機械化に関する討論集会を開催
96	1983. 5. 4	図書館部会、「ぱびるす」編集部合同による、附属図書館整理課長へのインタビュー
107	1984. 8. 16	FACOM9450 II 導入決定
108	1984. 10. 1	ただ今パソコン研修中 医学図書館
109	1984. 11. 5	機械化対策委員会発足！
110	1984. 12. 17	教研集会開かれる 機械化をめぐる討論
111	刊行年月日不明。1985年と思われる	昨1984/12/25、「図書業務のコンピュータ化」について、附属図書館事務部長と交渉

114	1985. 9. 2	8/16、附属図書館事務部長との折衝、テーマは機械化
115	1985. 10. 18	10/17、図書館部会討論集会在開催
122	1986. 2. 24	1/29、西島新総長と第一回交渉
123	1986. 3. 10	3/1、図書館職員春斗討論集会在開く
125	1986. 4. 21	堤美智子による、日教組大学部主催の学術情報シンポジウム参加記
126	1986. 5. 26	5/12 拡大図書館職員部会報告 図書館業務の機械化システムを検討
130	1986. 7. 14	85 年度図書館職員部会総会議案書
133	1986. 10. 13	1986 年度図書館部会活動方針（案）
135	1986. 11. 10	10/25 開催の秋の討論集会在報告
136	1986. 12. 8	秋年斗争山場 三つの検討チームで
139	1987. 2. 23	1/31 第 16 回教研集会在
142	1987. 4. 27	春闘方針決定
149	1988. 9. 1	学情システムの中の大学図書館（上） ～大学部教研集会在での竹村レポート～
150	1988. 11. 11	学情システムの中の大学図書館（下） ～大学部教研集会在での竹村レポート～
152	1988. 11. 30	‘88 年度秋季年末闘争の課題とすすめ方
155	1989. 5. 10	大丈夫ですか、VDT と健康 その①
156	1989. 6. 5	大丈夫ですか、VDT と健康 その②
158	1989. 8. 5	大丈夫ですか、VDT と健康 その③
161	1989. 9. 25	89 年度図書館職員部会活動のすすめ方および秋季・年末闘争の課題とすすめ方案
163	1989. 10. 9	どうなる？電算機リプレースは？問題は？
165	1989. 12. 18	総務課長折衝報告「議題 図書館目録システムの改善について」
号外	1990. 3. 8	’ 89 年度図書館職員部会秋季・年末闘争の総括と’ 90 年春闘方針（案）
174	1990. 7. 25	VDT 健康管理軌道に乗るか 7 月 13 日 VDT 健康管理で人事課長折衝
176	1990. 10. 2	’ 90 年活動方針（案）、決定！
177	1990. 10. 16	VDT 従事前検診&講習会 行われる！
178	1990. 11. 19	VDT 健康管理軌道に乗るか
191	1992. 3. 6	京大図書館目録システムについて 附属図書館事務部長との懇談交渉報告

197	1992. 11. 30	電子計算機システム更新における次期システムへの要望
-----	--------------	---------------------------

以上の記事の内容を踏まえて考察をすると、組合側の批判の要点は以下の8点であり、概ね、前述した大図研の挙げた問題点と同様であったと言える。

- ① (学内外の) 民主的でない組織運営への批判
- ② (特に小規模部局への) 情報共有 (研修等) の不足
- ③ 大局的な当局の姿勢が見えない
- ④ 超過勤務の増大 (への不安) (人手不足)
- ⑤ 予算の不足、偏り
- ⑥ 小規模大学 (京大内の小規模部局) 切り捨てへの不安
- ⑦ VDT 作業による健康への悪影響への不安
- ⑧ 民間、防衛省関連組織への情報流出の不安

### 3. 「大学図書館問題研究会京都」の分析

「大学図書館問題研究会京都」は大学図書館問題研究会京都支部 (現: 大学図書館研究会京都地域グループ) の支部報であり、1978年10月に創刊し、現在も「大学図書館研究会京都」と名称を変更し、定期的に刊行されている。最新3号は京都地域グループ会員のみ閲覧可能であるものの、創刊号以降、大学図書館問題研究会京都地域グループのウェブサイトにて全文が公開されている<sup>21</sup>。以下、「ぱびるす」同様に、1978年から1992年の記事<sup>22</sup>のうち、学術情報システムに関連していると思われるものを表3にまとめる。

表3 「大学図書館問題研究会京都」における学術情報システム関連記事

号数	発行年月日	タイトル
4	1979. 05. 02	機械化委員会発足
6	1979. 12. 22	「文教速報」から、学術情報システム関連の記事を転載
7	???? . ?? . ??	大図研全国研究集会 (関西集会) のお知らせ
8	1980. 10. 07	京都支部で機械化問題研究会が発足
10	1980. 12. 11	支部長あいさつで機械化に言及
11	1981. 02. 16	資料コーナー林良平「京都大学における学術情報システムの在り方」(静脩 (号外), 1-16, 1981-02) を紹介
12	1981. 05. 12	機械化研究小グループ活動報告
21	1982. 06. 25	「コンピューターと図書館員」(村上美代治)
22	1982. 09. 01	講演「大学図書館における情報処理トータルシステムの現状と課題を聞いて」(那須たみ子)
23	1982. 10. 01	同志社大学図書館における目録の電算化(井上正則)
26	1983. 09. 01	大学図書館問題研究会京都支部第6回支部総会議案
30	1984. 02. 15	学術情報の増大とネットワーク時代を迎えて(村上美代治)
34	1984. 10. 01	大学図書館問題研究会京都支部第7回支部総会議案書
35	1985. 02. 01	「学術情報システムと大学図書館の機械化」(竹村心)

41	1986. 10. 15	大学図書館問題研究会京都支部第 9 回支部総会議案書
45	1987. 10. 15	大学図書館問題研究会第 10 回支部総会議案書
47	1988. 04. 01	電算化は自主性が大事
55	1989. 05. 15	第 11 回大学図書館問題研究会京都支部総会議案書(事務局)
58	1989. 09. 25	「みんなで走ろう RUNNERS : 立命館大学学術情報システムのとりくみ雑感」(若井勉)
59	1989. 10. 01	大学図書館問題研究会京都支部第 12 回総会議案書
62	1990. 01. 15	「求める資料を求める人の手に(1)」(竹本文夫)
69	1990. 10. 09	大学図書館問題研究会京都支部第 13 回総会議案書

以上の記事の内容を踏まえて考察をすると、以下の事実がわかる。機械化問題研究会は基本的には目録やデータベースの勉強をしていた。全般的に、学術情報システムや機械化に関する記事の量は多くない。しかし、支部総会議案では必ず批判的な内容が掲載されており、批判内容は主に「大学間格差拡大」「目録作業の二度手間を引きおこす」「政府・独占資本・軍事体制の介入」であった。個人による署名記事では、学術情報システムや機械化に関して肯定的な見解や、是々非々の対応も多いが、署名入り個人記事を「大学図書館問題研究会京都支部としての見解」とみなすかどうかは議論の余地があるだろう。

#### 4. 結論と今後の課題

以上の分析の結果、「ぱびるす」と「大学図書館問題研究会京都」では論調が異なることがわかった。より具体的には、「VDT 作業による健康への悪影響への不安」といった議論が「大学図書館問題研究会京都」では見られない。このような論調の差異は、京都大学職員組合は労働組合であり、大学図書館問題研究会京都支部は業界団体(研究会)であるという発行主体の差異から生まれたものか、あるいは、京都大学という組織特有の特異性から生まれたものかといった点について、今後、分析を進めたい。

#### 謝辞

本研究は檜崎羽菜氏との共同研究<sup>2 3</sup>から着想を得た研究です。共著者の檜崎羽菜氏(元筑波大学情報学群知識情報・図書館学類)、指導教員である逸村裕先生(筑波大学教授)に感謝します。また、資料の提供をしてくださった名古屋大学法学部アジア法資料室の石田康博氏にも感謝します。

#### 脚注

<sup>1</sup> 東条文規『図書館にドン・キホーテがいた頃 : 1980~90 年代の図書館少数者運動』ポット出版プラス, 2021, 246p.

<sup>2</sup> 同上, p.82.

<sup>3</sup> 同上, p.97.

<sup>4</sup> 同上, p.98.

<sup>5</sup> 同上, p.105.

---

<sup>6</sup>同上, p.108.

<sup>7</sup>同上, p. 112-113.

<sup>8</sup>かみかた機械化研究グループ『「学術情報システム」その現状と課題：研究情報と大学図書館のゆくえ』大学図書館問題研究会出版部, 1985, 51, p.xvii~xxii. なお、ここで挙げられている文献リストと同一の文献リストが、かみかた機械化研究グループ「学術情報システムに関する文献レビュー・文献目録」『大学の図書館』126, 1985.12, p.23-28.に再掲されている。

<sup>9</sup>かみかた機械化研究グループ『文部省学術情報システムへの評価と提言』大学図書館問題研究会出版部, 1986, p.45~94.

<sup>10</sup>かみかた機械化研究グループ『大学図書館の機械化・電算化、学術情報システム文献リスト'87年版』1987,95p.

<sup>11</sup>かみかた機械化研究グループ『大学図書館の機械化・電算化、学術情報システム文献リスト'88年版』1988,88p.

<sup>12</sup>かみかた機械化研究グループ『大学図書館の機械化・電算化、学術情報システム文献リスト'89年版』1989,80p.

<sup>13</sup>巨大情報システムを考える会『巨大情報システムを考える会・会報』6~11, 1991.10~1993.8.

<sup>14</sup>湯浅俊彦『出版流通合理化構想の検証：ISBN導入の歴史的意義』ポット出版, 2005, 196p.

<sup>15</sup>湯浅俊彦『日本の出版流通における書誌情報・物流情報のデジタル化とその歴史的意義』ポット出版, 2007, 369p.

<sup>16</sup>NII「沿革」<<https://www.nii.ac.jp/about/overview/history/>> [引用日:2022-02-06]

<sup>17</sup>東条文規, 前掲 1, p. 118-119.

<sup>18</sup>京都大学職員組合「機関紙・刊行物」<[https://legacy.kyodai-union.gr.jp/?page\\_id=49](https://legacy.kyodai-union.gr.jp/?page_id=49)> [引用日: 2022-02-06]

<sup>19</sup>京都大学職員組合「京都大学職員組合について 支部・部会」<[https://www.kyodai-union.gr.jp/about\\_us/%e6%94%af%e9%83%a8%e3%83%bb%e9%83%a8%e4%bc%9a/](https://www.kyodai-union.gr.jp/about_us/%e6%94%af%e9%83%a8%e3%83%bb%e9%83%a8%e4%bc%9a/)> [引用日: 2022-02-06]

<sup>20</sup>京大転組図書館職員部会編『ばびるす』45~198,1978.2~1992.12.

<sup>21</sup>大学図書館研究会 京都地域グループ (DTKK)「グループ報 (支部報) 目次 (301号~最新号)」<[https://www.daitoken.com/kyoto/bulletin/bulletin\\_new.html](https://www.daitoken.com/kyoto/bulletin/bulletin_new.html)> [引用日: 2022-02-06]および大学図書館研究会 京都地域グループ (DTKK)「支部報目次 (1号~300号)」<[https://www.daitoken.com/kyoto/bulletin/bulletin\\_v0001-0300.html](https://www.daitoken.com/kyoto/bulletin/bulletin_v0001-0300.html)> [引用日: 2022-02-06]

<sup>22</sup>大学図書館問題研究会京都支部『大学図書館問題研究会京都』1~95,1978.10~1992.12.

<sup>23</sup>今野創祐, 檜崎羽菜「大学図書館における分類の変更：京都大学の事例より」『同志社図書館情報学』31, 2021.12, p.1-15.